

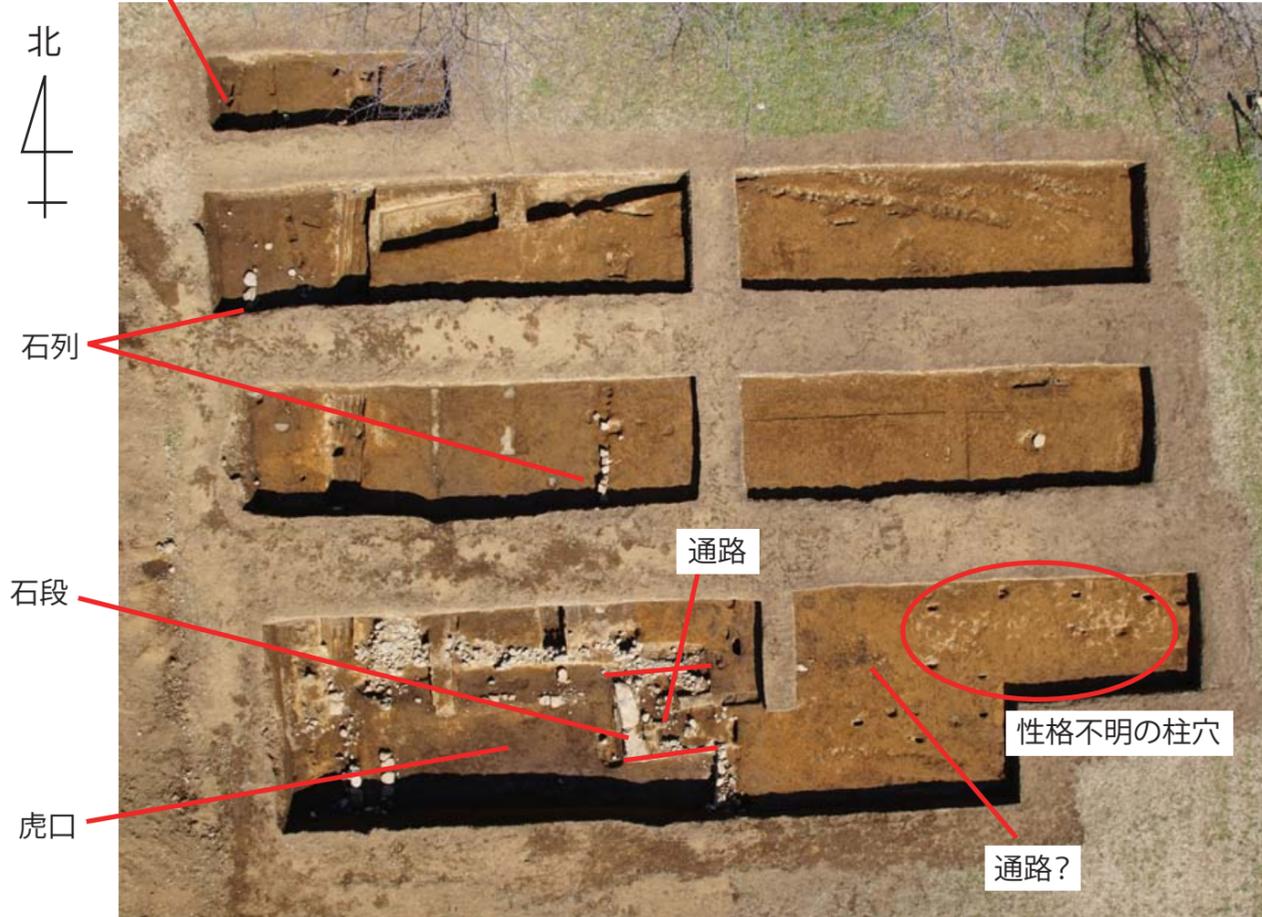
令和2年度興国寺城跡発掘調査 説明資料

令和3年 3月22日 (月)



第1地点の埋没していた石垣

巨大な柱穴



第2地点調査区全景

<興国寺城跡の概要>

興国寺城は、北条早雲(伊勢宗瑞)の旗揚げの城として知られています。興国寺城の南を通っていた当時の主要街道である根方街道は、箱根や足柄へ向かう道にもつながっており、これを押さえるという戦略的意味は、戦国時代において極めて高かったのでしょう。

そして早雲旗揚げ以後も、興国寺城の重要性は江戸時代初期まで失われることはなく、今川氏、後北条氏、武田氏、徳川氏、豊臣方の中村一氏の家臣である河毛重次、そして関ヶ原の戦い以後には、徳川氏の家臣である天野康景など、120年間でなんと16人以上の城主・城代が入れ替わりました。発掘調査でも15世紀後半から17世紀初頭までの遺物が出土しており、ここが長期にわたって利用されていたとする文献記録とも一致します。

一四八七	北条早雲、富士郡下方十二郷と興国寺城を与えられる
一五四九	今川義元、興国寺城を普請する
一五六九	甲相駿三國同盟崩壊。北条氏が、興国寺城を奪う
一五七一	武田信玄、興国寺城を攻めるが失敗
一五七二	武田氏・北条氏が和睦し興国寺城は武田氏の支配下に
一五八二	武田氏が滅亡し、興国寺城は徳川氏の支配下に。
一五九〇	豊臣秀吉、小田原北条氏を滅す。徳川氏は関東に移封。駿河国は中村一氏に与えられ、家臣の河毛重次が興国寺城城主となる
一六〇一	天野康景が一万石を与えられ、興国寺城城主となる
一六〇七	天野康景が、城を捨てて逐電。興国寺城は廃城となる

<今年度の調査成果>

今年度は伝天守台南面にある石垣(第1地点)と本丸の中心部(第2地点)の調査を行いました。第1地点の石垣は、現在地上に露出しているもので長さ10m、高さ5m程度ですが、今回の調査で上は抜き取られているものの、地下にはまだ2段程度の石が残されていることがわかりました。これにより本来石垣は長さ25mほどあったこととなります。中には長さ1.5m程度の大きな自然石も使われており、石と石の間には隙間を埋めるように小さな石が充填されています。このような積み方は「野面積み」と呼ばれるもので、静岡県下の城郭では戦国時代の終わりごろに拠点となる城郭に出現してきます。このような類例から考えると、この石垣もおそらく16世紀末～17世紀初頭(河毛もしくは天野段階)に造られたと考えられます。

第2地点は本丸のちょうど真ん中あたりを調査したものです。昨年度も調査していましたが、ここでは入口施設(虎口)と石段による通路を検出したため、今年度は調査区を北へ広げ、通路の先にどんなものがあるのかを確認することとしました。残念ながら明瞭な痕跡は検出されませんでした。建物もしくは土堀などの基礎と考えられる石列が見つっています。また調査区の北西では、深さ1m以上も彫りこむ柱穴を発見しています。石列も柱穴も残念ながら今年度の調査区の外へと広がっているため、詳細はわかりませんが、本丸最奥部に近い地点での検出であるため、かなり重要な施設を検出した可能性があります。これについては今後も調査を進めて解明していく予定です。



第2地点の石列



第2地点の巨大な柱穴



現在の興国寺城跡

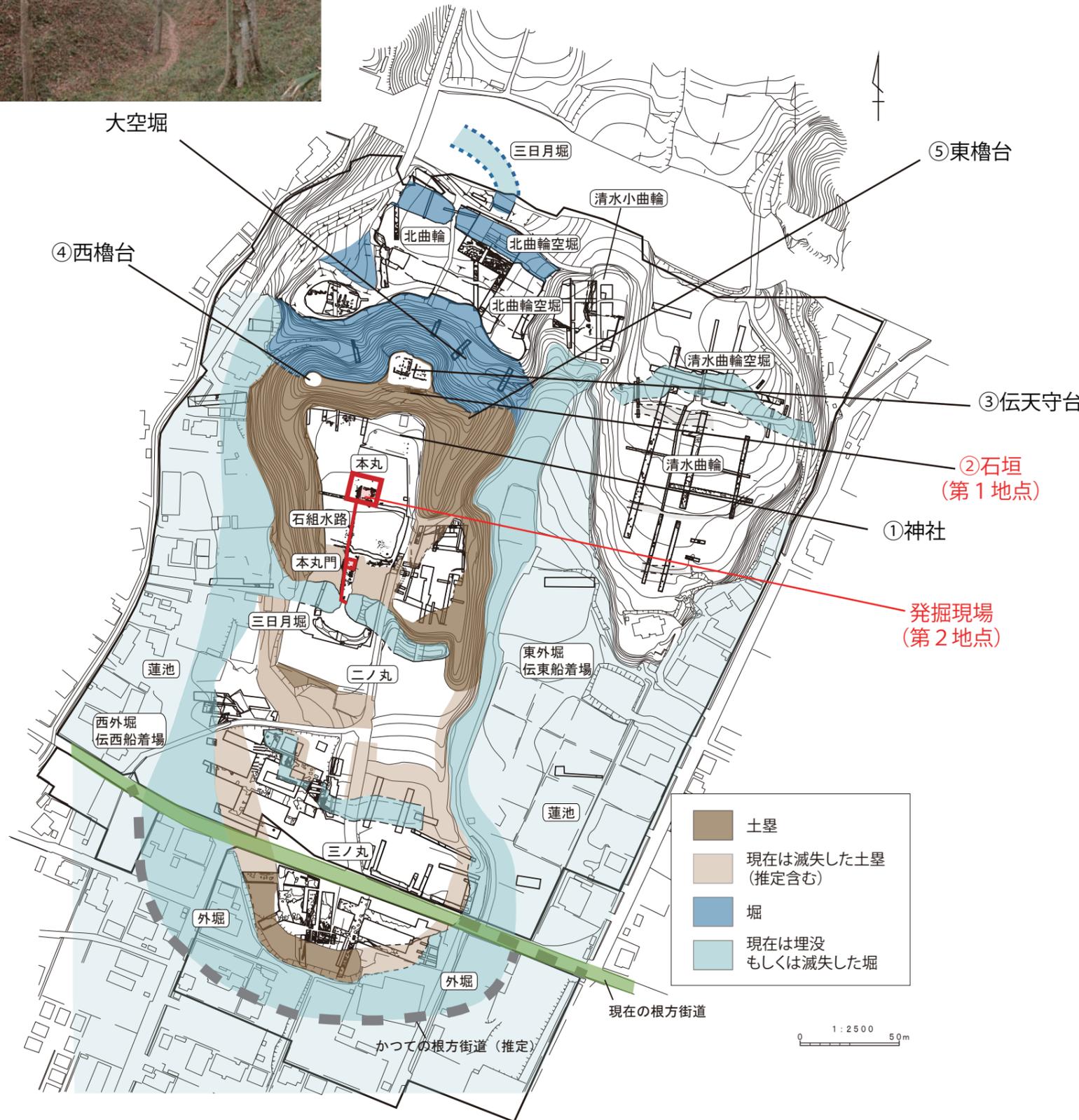
- ①神社：初代城主の北条早雲や最後の城主である天野康景の碑などがあります
続日本 100名城のスタンプもここで押すことができます。
- ②石垣：今回の調査で延長約 25m、高さ 4m、角度 60 度を測る石垣と判明



初代城主北条早雲碑



伝天守台下の石垣



興国寺城跡全体図

- ③伝天守台：昭和 57 年に調査され、2 棟の礎石建物跡が発見されました。
東棟が約 7m 四方、西棟が約 8m 四方となっています。伝天守台の北側には大空堀と呼ばれる興国寺城跡の最大の堀があり、最大幅は約 30m、伝天守台からの比高差は約 15m を測ります。
- ④西櫓台：かつては「伝西櫓台」と呼ばれていましたが、発掘調査によって 1 辺約 5m の建物基礎が発見されたことから、本当に建物があったことがわかりました。ここからは伊豆半島も見通せます。
- ⑤東櫓台：発掘調査は行われていませんが、西櫓台と同じく川原石が散っているため、同じように建物が建っていた可能性が高いです。



伝天守台礎石建物跡



西櫓台礎石建物跡